水損紙資料の初期対応と、人材育成についての取り組み

北村 美香　（合同会社結creation／高槻市立自然博物館）
西澤 真樹子 （認定特定非営利活動法人大阪自然史センター）

はじめに…

今後起こりうる自然災害に備えて、博物館等の現場で「今」何ができるかを考察することが目的。

①至った経緯
東日本大震災で被害を受けた、三陸沿岸地区へ
教育普及活動の中で、文化財レスキュー作業にも参加

知識や経験がなくても出来ることがあるのを経験する

②至った経緯
2016年の台風10号で被害を受けた、
岩手県遠野市での水損図書レスキュー作業に参加

作業を通じて、
文化財への関心と保存の意識が芽生えるのを実感

③至った経緯
令和 2 年 7 月豪雨に伴う球磨川氾濫で被害者へのヒアリング調査と、水損植物標本レスキューに参加

復興には個人レベルのモノも伝え、残すことの大切さを改めて感じ、そのために博物館は何ができるかを考える

東日本大震災被災地や遠野での経験

④至った経緯
集中豪雨の発生で水害が発生
資料レスキュー活動や成果報告もされているが…

・講習などになかなか行けない
・自館で起こったら、まずどうすればいいのか？
・素人ができることじゃないだろうし

…などの声をたびたび聞く

現場からの声

必要なのは、人材育成と現場のニーズを知る場の創出ではないか？

目　的

本研究の目的は、水損紙資料の初期対応と人材育成の実践を通して、災害時の資料保存活動における市民参加の可能性を検討することである。資料や文化財を前に「何かしたい」と感じる市民の気持ちを、学びを伴った適切な行動へとつなげる試みとして本取り組みを行った。

事前準備

場づくりをする際に足並みをそろえるための事前準備として、3つの要素を設定する

1	2	3
館種を問わずに扱う資料を、講習会の対象 ↓	専門性や経験値などを問わない研修構成 ↓	手元に置けて緊急時に活用できる資料作成 ↓
図書資料	**応急処置**	**リフレット**
共通する資料	対象者の設定	継続性

講習会開催①

2020年に大阪市立自然史博物館にて初回の講習会を実施
実施評価と参加者のアンケートをふまえて、内容等をブラッシュアップする

被災時の資料救出と応急処置について（座学と実習）
資料レスキューの基礎的な情報を座学と実技で

立地条件に近い事例紹介（津波 河川氾濫 雨漏りなど）
実施場所で起りそうな事例に併せた紹介をする

開催地特有の課題共有とネットワーク構築（協力団体 広報）
事前防災に向けてのコミュニケーションと関係づくり

被災時の資料救出と応急処置について
資料レスキューの基礎的な情報共有と事例
講演 ：神戸大学　松下正和 氏

東日本豪雨の資料レスキュー
岩手県遠野市の事例
市民協働でおこなった資料レスキュー事例
講演：遠野市立博物館　前川さおり氏

現在作業中の
植物標本レスキュー紹介
昨年被災した植物標本レスキューの紹介
講演 ：大阪市立自然史博物館　佐久間大輔氏

参加者からの声（アンケートより）

講習会参加者 → 15名
質問、意見 → 14件
- ①技術、専門的なこと → 6件
- ②体験談について → 4件
- ③被災前の準備・対応など → 3件
- ④レスキューへの参加 → 1件

今回の講習会実施

・間口を広げてレスキューに関わる人材育成をおこなう
　共通する資料で専門に限った意識をなくす
　市民参加の実現に向けた場の構築
・得た経験の継続と活用できるような資料作成

→ **ねらいの実現はある程度はできた**
　講習会等の機会を継続し、関わる人を増やしていく
→ **実施により不足している視点を得ることができた**

講習会開催②

前回はなかった事前防災についての視点を加えた構成に
被災時だけでなく、平常で出来ることや技術の応用を意識

1	2	3	4
館種を問わずに扱う資料を、講習会の対象 ↓	専門性や経験値などを問わない研修構成 ↓	レスキュー事前・事後の準備や作業意識 ↓	手元に置けて緊急時に活用できる資料作成 ↓
図書資料	**応急処置**	**備え**	**リフレット**
共通する資料	対象者の設定	準備と対応	継続性

講習会実績

2021年
大東市立歴史民俗資料館（大阪府）
人文系事例、レスキュー作業に入る前までの流れも伝えることを意識

2022年
大東市立歴史民俗資料館（大阪府）
図書館司書の方、ボランティアの方を対象に水損資料の応急処置を広義でとらえた実習を

2023年
滋賀県平和祈念館（滋賀県）
自然災害がこれまで少ない地域での実施のため、後方支援や被災資料受入を意識

2023年
太地町くじらの博物館（和歌山県）
南海トラフ地震の被害想定がされる地域として被災した際のフローチャートを題材に都市部から離れた地区での実施必要性を実感

2024年
志摩市歴史民俗資料館（三重県）
南海トラフ地震の被害想定がされる地域として被災シュミレーションをワークに入れる
遠隔地での講習会実施需要の高さがより明確に

2024年
神戸大学（兵庫県）
レスキュー参加経験者向けに、写真資料対応や乾燥作業のバリエーションを増やして実施

2025年
なら歴史芸術文化村（奈良県）
自然災害が少ない地域だが、文化財修復等を実施している会場だったため、レスキューについての認識や行動を参加者が考える内容に

2026年（2月13日開催予定）
きしわだ自然資料館（大阪府）
図書館の方からの問い合わせが多いことをふまえて、内容を検討中

ご協力いただいた講師の皆様
- 天野真志氏（国立歴史民俗博物館）
- 甲斐由香里氏（三重県総合博物館）
- 佐久間大輔氏（大阪市立自然史博物館）
- 前川さおり氏（遠野市立図書館・博物館）
- 松下正和氏（神戸大）
- 溝邊悠介氏（京都芸術大学）
- 山内利秋氏（九州保健福祉大学）

考　察

・間口を広げてレスキューに関わる人材育成
　→ 人文系の方に届きやすい会場設定と講師選び、ねらいの達成と新たな課題
・レスキュー要請から作業までの準備
　→ 作業中、作業後の対応も含めた事例紹介と資料作成、次のステップへ！

今後への展望

いつ災害が発生するか分からない中、自主防災の中に資料レスキューが意識されることを目指す
①出来ることを自ら取り組める人材の育成と体制づくり
②必要な知識や技術を学ぶ講習会実施
③講習会開催により、ネットワークの構築も目指す
④地域の資料や博物館の活動との距離をなくし、関心を持ってもらうきっかけづくり

※本事業は、JR西日本あんしん社会財団（2023-2025年度）、日比基金（西日本自然史系博物館ネットワーク　2020−2021年度）の助成をいただき実施しました。